分　野　（　2　）気管支ぜん息患者の年齢階層毎の長期経過・予後を踏まえた健康相談・健康診査・機能訓練事業の事業内容の改善方法に関する研究

研　究　課　題　名：気管支ぜん息患者の年齢階層毎の長期経過・予後を踏まえた健康相談・健康診査・機能訓練事業の事業内容の改善方法に関する研究

調査研究代表者氏名：秋 山　一 男

評価コメント
・かなりの成果が上がっている。長期予後の追跡調査の成功を祈っている。 ・成人の対象者の追跡が困難となったためで、WEB調査によって新たな研究になったのは残念である。コホート研究として続けられる可能性を探って欲しい。 ・小児に関しては5年間のフォローができており、今後も脱落例がないよう継続して調査を行っていただきたい。また、最近の治療・管理手法は進歩しているので、新たにコホートを設定できないか。 ・小児の調査において喘鳴群の喘息移行例と非移行例との比較検討により、移行群の特徴が明らかにされれば、移行ハイリスク時への早期介入が的確に行われるので期待される。予後に影響する因子の解明により、寛解・治癒率の向上が期待される。 ・小児及び成人喘息患者の経過を長期にフォローしている調査研究であることを特に評価する。 ・小児喘息の長期計画による予後調査も一応の対象数を維持できているので今後の脱落例の最小化を図ることを期待する。 ・成人喘息の長期経過、予後調査及び予知法に関する研究成果、WEB調査でのBMI130以上の肥満が喘息発症を倍にする可能性を示すデータは、今後の生活習慣病の指導における喘息の意義を示した。 ・喘息の長期予後がどうなるかということを調査することは常に古くて新しいテーマである。これまで世界的にも散発的に報告が行われてきたが、症例数や観察期間などの点で十分満足できるものはまだないと言ってよいと思う。その意味で非常に重要な研究になるので一例一例を疎かにせず批判に耐える信頼性のあるデータを集めて欲しい。 ・Prospectiveな研究であるから今後長い年数を必要とする。40年後まで視野に入れているのは大変結構であるが、一代で研究は成し遂げられないので、後に続く者が研究を継続できるような体制も作っておく必要がある。 ・小児では、5年目の調査が終了した。WEB調査の問題点を記述すべきである。成人での予後因子の1つとして、ICSが有症率を下げていることが判明した。メタボ健診利用は重要である。